

宮城県南三陸町 伊里前小学校, 歌津中学校

学校再開の現状ヒアリング・視察報告【作成：伊藤俊介（東京電機大学）】

日 程：2011年7月27日（水）

訪問者： 教育施設小委員会

伊藤俊介（東京電機大学），梅野 勇（香山壽夫建築研究所）

お話を伺った方： 伊里前小学校教頭・菅野壽子先生

歌津中学校長・阿部友昭先生

調査内容と時程：

1. 12:00~12:30 名足小学校（被災した小学校）校舎視察
2. 13:00~14:30 伊里前小学校ヒアリング
3. 15:30~17:00 歌津中学校ヒアリング

1. 町の被害の概要

- ・伊里前小，歌津中は伊里前湾に面した歌津地区（旧歌津町）の高台に立地。伊里前小が町を見下ろす位置にあり，そのさらに高台に歌津中がある。
- ・南三陸町は震度6の揺れ。津波により役場を含め町全体が壊滅的な被害を受けた。
- ・津波は伊里前小1階まで達した。小学校直下の公民館は破壊された。
- ・伊里前小，歌津中ともに児童生徒の被害者はいなかった。しかし，自宅が流された児童生徒は多数。
- ・町内の学校は5月10日に始業式を行い再開。
- ・直線距離で2kmほど離れた名足小学校が1階天井まで浸水し使用不能となったため，現在は名足小が伊里前小に間借りして再開している。
- ・伊里前小，歌津中ともに校庭の一部に仮設住宅が建つ。
- ・南三陸町では戸倉地区の小中学校が隣接する登米町の廃校を使用しており，町内からバスで片道1時間かけて通学している。



歌津地区中心部(Google map)



伊里前小と名足小の位置関係(Google map)

2. 伊里前小学校

○地震発生時の状況

- ・ものが落ちたりはしなかったが、非常に長い横揺れが続いた。
- ・低学年児童の下校直後だった。児童は近隣の保健センター内の学童保育、公民館、校庭の他、駅で列車待ち、乗合タクシーに乗って下校中の児童もいた。教職員が急いで学校外にいる児童を迎えに行き、学校に連れ戻した。乗合タクシーも運転手が学校に戻ってくれた。
- ・人数確認の後、中学校に向けて避難した。避難マニュアルでは、保護者に引き渡すことになっているが（3月9日には引き渡し訓練もやっていた）、「未だかつてない揺れ」だったため、引き渡しをせずに高台に避難した。
- ・1次避難場所：校庭，2次：歌津中学校，3次：高台と決まっていた。歌津中校庭で中学生といっしょに待機したが、駅まで波が来ていたので3次避難場所に移った。児童には「振り向いてはだめ、前を向いて」と指示をして歩いた。
- ・なぜ引き渡しをせずにすぐ避難する判断をしたか、とよく聞かれるが、「状況から判断した」としか言いようがない。揺れは尋常ではなかったし、周辺道路の安全が確認できなかったのも、直感的に判断した。「帰してくれ」という保護者もいたが、説得していっしょに高台に逃げた。引き渡さなくて良かった。防災無線は「6m以上の津波が来る」と言っていた。この地域では地震が来たら津波が来るという意識でいるので、まず確実に避難することを考えた。

○再開までの経緯

- ・1階が45cm浸水したが、波の勢いは比較的弱まっていたので、清掃と消毒、床のワックスかけをして使えるようになった。
- ・3月11日の地震で揺れによる被害はなかったが、4月7日の余震で3階天井が落ちたので補修工事をした。
- ・4月中旬まで体育館は遺体安置所になっていた。
- ・4月29日に卒業式を行った。

○学校再開の状況

- ・オープンプランの校舎である。
- ・伊里前小140名（6学級＋特別支援）、名足小77名（6学級＋特別支援）が同居。
- ・余裕教室と一部の特別教室（音楽室、図書室）を名足小教室に充てた。
- ・教室は両校の同学年2学級を、オープンスペースを共有するユニットにまとめている。「同じ中学校に進むのだから、今から交流を深めても良い」と考えた。
- ・卒業式、入学式は2部制で学校別に行った。
- ・音楽の授業で大物楽器を使う場合は、多目的ホールを閉め切って使う。
- ・PC教室→名足小職員室として使用、パソコンクラブや調べ学習のために図書室の一部に

PC コーナーを設けて、図書室を学習スペースとしている。保健室は共有。

- ・教室数を確保するために両校で計5学級ある特別支援学級を2教室にまとめ、部屋を半分
に仕切ってそれぞれのスペースを作っている。難聴の児童がおり、その児童は学習支援室
というクローズドに出来る部屋を使用。
- ・教室配置については、学校を隅から隅まで歩いてどこをどう使えるか考えた。
- ・週1回、両校の校長・教頭・教務主任による運営委員会を開く。校務分掌等の詳細は教務
主任どうしが調整する。
- ・被災した名足小からも使える家具は運んできて、全体で再配分した。
- ・中学校の体育館・武道場が避難所となっているので、小学校の多目的ホールで剣道部、体
育館でバレー部が部活動を行う。サッカー部が校庭を借りていたこともある。公民館も被
害が大きく、小中学校が唯一残った地域施設となっている。地区ミーティングや健康診断
にも多目的ホールを使う。
- ・7月1日現在では自宅83名、避難所23名、仮設住宅9名、その他33名だが、避難所の児
童はいずれ仮設住宅に移るだろう。現在は伊里前小3台、名足小2台のスクールバスを運
行している(15:30下校)。全校児童の約7割がバスを利用。もともと通学手段は徒歩、自
転車、乗合タクシー、JR、送迎と様々だった。「平成の森」(伊里前小と名足小の中間地点)
に大規模な仮設住宅があり、両校の児童がそこに住んでいる。敷地内の仮設住宅に住む児
童もいる。
- ・町内に仮設住宅が建ち始めて、一時避難していた家庭も戻ってきた。児童数は10名程度
の減ですんだ。
- ・県や他県からのカウンセラーが来る。「子供のサインをキャッチする」のは大事。
- ・教職員の負担に対しては、勤務体制(定時に帰れるようにする等)で対応している。教頭
先生自身は7月になって初めて週末に休めた。
- ・しばらくは水道水を飲んではいけないとのことで、ミネラルウォーターを使用していた。
水道水の飲用許可が出て、プールも実施できるようになったのは良かった。
- ・給食はパン・牛乳・おかずの簡易給食である。

○今後について

- ・町の方針がまだ決まらない。2校体制をどうするかも未定。
- ・スクールバスの運行継続が出来るかは大きな問題。
- ・学校はいざという時に多機能に使えることが重要だと思った。(教頭)



市街地から学校を見る（手前は公民館）



高台へ上る道から市街地を見る



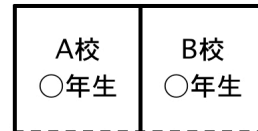
教室からの眺め



敷地内の仮設住宅



オープンプラン型の校舎である



オープンスペース

2校の同学年をユニットにする
[南三陸町伊里前小・名足小]

教室配置の考え方



名足小職員室はPC教室を使用



図書室にPCコーナーを設置



多目的ホール



校舎端部の特別教室（左：図工室，右：音楽室）



音楽室（左）と図工室（右）を教室に使用

3. 歌津中学校

○避難所の状況

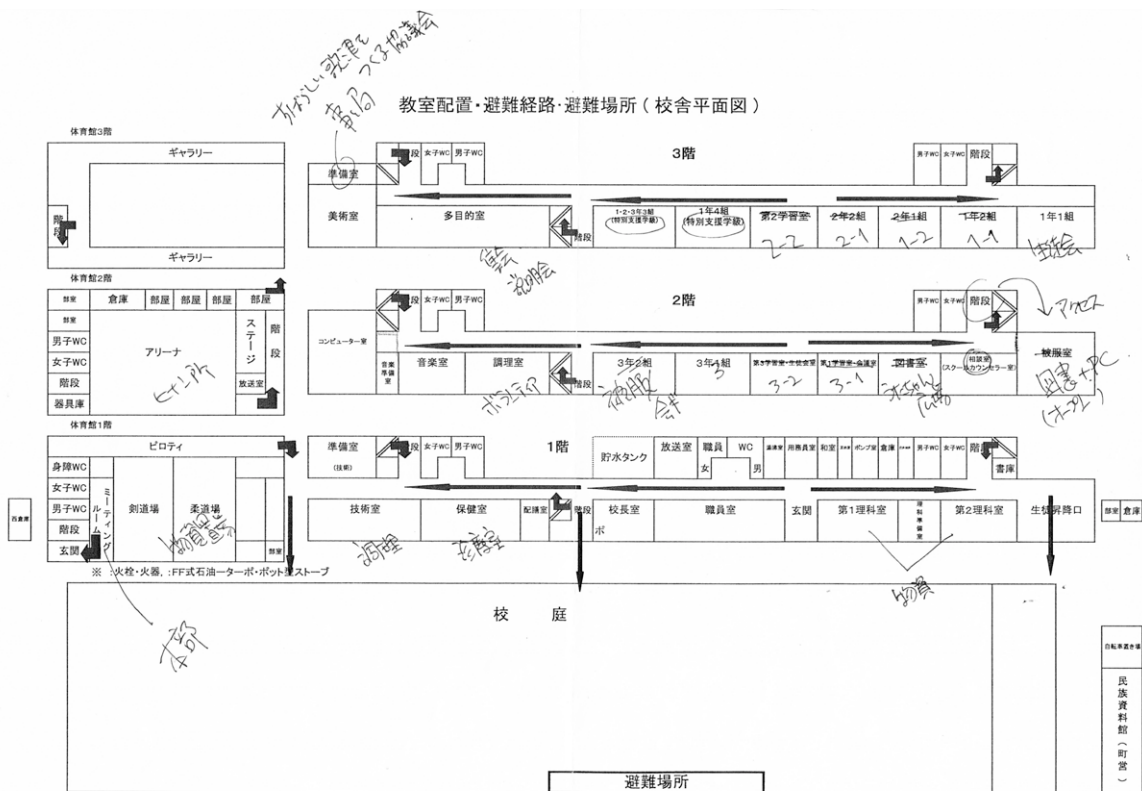
- ・2階建ての体育館が避難所となり、一時最大700人が生活していた。5月の学校再開時には2~300人、ヒアリング時点では10数人がいた。校長先生も自宅が被災し、学校の避難所で暮らして運営をしていた。
- ・体育館は2階建て。2階アリーナが避難所となり、1階剣道場・柔道場が物資置場となっている。1階のミーティングルームが本部になっている。一時、全員が入りきれない時にはピロティや校庭にテントを張った。
- ・はじめの1・2週間はまったく物資が入って来なかった。おにぎりを数人で分け合う状態が続いた。

○校舎の使い方

- ・本震では校舎に大きな被害はなかったが、4月7日の余震でガラスが割れた。
- ・7学級（3年生のみ3組まで）+特別支援学級2学級の規模である。学級教室は確保されている。
- ・1階は職員室・校長室を除き、避難所機能に充てられた。保健室は医務室となり、体育館

に最も近い技術室を調理室として使っている。2 室ある理科室は今も物資置場とボランティアの部屋になっている。

- 2 階では、図書室は子供の遊び場（うちちゃん広場）になり、被服室に図書と PC が置いてある。調理室をボランティアが使用する。
- 3 階多目的室は、現在、公共施設がないので地域の集まりや説明会等のために町内の会議室としても使う。「すばらしい歌津をつくる協議会」事務局（震災前からある組織）が、もともと事務局のあった公民館が被災したため、美術準備室に置かれている。
- 校庭の端にボランティア団体の運営による風呂小屋がある。ボランティアは調理室と理科室の一室を使用して常駐している。運営のリーダーは2代目。「避難所の人に必要なることを、いちばん早くから提供し、継続的に行っている」（校長）
- 敷地の一角に仮設住宅が建つ。当初は校庭いっぱい建設する計画であった。しかし仮設住宅は年単位の設置となり、長期間校庭が使えないのは中学生の成長からみて問題なので避難所住民と共に抗議をした。



○現在の問題点

- ・仮設住宅の入居抽選を、地域ではなく町単位で行っており、地域のまとまりがバラバラになってしまう。
- ・通学にスクールバスが必須だが、存続が不透明である。
- ・登米町の廃校で再開したところは遠すぎる。学区の住民が集団で登米町に避難したわけではないので、1時間以上バスで通っている。ただし年度中に再び変更するのは反対。

○その他（校舎内で会った先生の話）

- ・「はじめの1、2週間は何も届かなかった。はじめはおにぎり1個を数人で分け合う状態」
- ・「地震時にはポータブルテレビが一番の情報源だった」
- ・「トイレが最も困った。流す水がない、高齢者は和式が負担、トイレに行かなくていいように水分をとらなくなり、体調を崩した。今も下水処理のキャパシティが不足しているので、紙は流さずにゴミ箱に捨てて処理する」
- ・「地震以後の記憶があいまい。あまりに忙しかった、やるが多かったなので、あの時なにやってたっけ？あれは何月頃だっけ？とわからなくなる」



体育館と仮設住宅



調理室となっている技術室



仮設の風呂



美術準備室に地域団体事務局



多目的室



廊下に置かれた物資

4. 調査者コメント

- ・被災地に身を置き、多くの先生から 3.11 のあの時を、いかに子ども達と生き抜き、そして極限の状況下で学校を再開してきたか、その時々求められた重要な判断も含めてお話を伺った。被災地が広域であり、全てを網羅することは難しいと思われるが、できるかぎり多くの事例を収集分析し、広く共有していくことが、今後の大災害を考える上でも大切ではないかと強く感じている。

【梅野】

- ・歌津地区では、地域施設としての学校の役割がきわだっている。現在も避難所として使用されている中学校の様子と、平常に近い感のある小学校のコントラストが印象に残るが、小学校も中学校の機能を一部バックアップし、地域にも利用されており、実はそれぞれが地域施設の役割を分担している。中学校では、校長先生が独自の判断で学校施設をイレギュラーな形で使用し、学校としての機能を保ちつつ避難所として運営していた。小学校では、同居する 2 校を分けるのではなく一体感のある学習環境を作る発想で教室を配置していた（これはオープンスペース型のプランを活かした使い方である）。いずれの例でも、非常時に施設のキャパシティを活かす様子に感銘を受けた。災害時に備えた学校施設の計画は今後重視されると思われ、今回の災害でどのようなニーズが発生したかを把握する必要がある。一方、異なる地域、違う災害状況下で同じニーズが発生するとは限らない。今回の災害における学校再開の事例からは、非常時のニーズに応えるにあたって、施設（部屋）のどのような建築的な性質が先生方の目に留まり、活用されたかを学び、予測できない事態でも柔軟な活用方法を現場で工夫しやすい施設計画を考えなければならぬと感じた。

【伊藤】

以上